

# 翻訳・要約における意味のゆらぎについて

## (On Meaning Change in Translation and Summarization)

新田義彦 (Yoshihiko Nitta)

日本大学経済学部 (Nihon University, College of Economics)

### 1. はじめに

翻訳および要約は、言語情報を広範な地域・分野に伝達するために必須の言語処理サービスである。しかし翻訳および要約においては、もともとの意味、つまり原文情報作成者の意図したメッセージ内容が変化してしまう現象も不可避である。保存・保持すべき原文の「意味」とは何か？ 翻訳や要約にどのような工夫をすれば、意味の保存の最大化・最適化が図れるか？ などの問題について、直観的・内省的に考察した結果について報告する。取り上げる文種は、技術文、日常生活文、数学の命題文、文学作品、詩文、などである。また、人手による翻訳および機械翻訳における意味の変化についても取り上げる。要約は、文の長さを縮約する翻訳と見なせる。

本論文は、森敦の特異な哲学的自伝小説「意味の変容」に触発されたことを付言する。

### 2. 「翻訳」という概念の把握

#### 2.1 翻訳の定義

Anthony Pim (2010) による翻訳の定義は、伝統的な哲学的考察により翻訳者の内省作業を論じたものであるが、計算機による形式処理の機構と関わる部分もある。

翻訳を行うものは、それが人脳によるものであれ機械（コンピュータ・プログラム）によるものであれ、起点言語の文（あるいはテキスト）を、等価な意味を持つ終点言語（註：対象言語ともいう）の文（あるいはテキスト）に、変換することに最大限の努力を傾注する。起点言語は源泉言語（source language）、終点言語は目標言語（target language）と呼ばれることもある。

起点言語の文（あるいはテキスト）は原文（原テキスト）、終点言語の文（あるいはテキスト）は訳文（翻訳テキスト）と呼ばれることもある。むしろこれが一般的である。

この意味的等価の概念を厳密化したものが「**自然的等価**」の概念である。またこの自然的等価の概念を、異なる言語圏における言語運用の実態を観察し、それを意識して翻訳をするという観点で精密化した概念が「**方向的等価**」であると（少し乱暴に）見なすことにする。

#### 2.2 自然的等価

自然的等価とは、自然状態で存在する意味的等価性のことである。異なる言語圏（複数の言語圏）を超越的に観測すると、その自然状態の中に、言語翻訳という行為とは無関係に、意味的に絶対等価な記述文（テキスト）が存在している、という考え方が、「**自然的等価**」である。理想的な翻訳は、この既に存在する絶対的に等価な文（テキスト）の対応（註：当然、方向性を持たぬ絶対的対応）つまり等価ペアを見つけて、一方から他方へ橋渡しをすることと言える。

幻想とも言える理念であるが、翻訳者がよい翻訳、つまり原文（起点言語）側のメッセージ内容を出来る限り正確に変形することなく伝える努力を先導する理念として重要な役割を果たしている。

「翻訳」とは起点言語のメッセージに最も近い自然的等価を終点言語側で再現することである。[Nida and Taber 1969]（註：終点言語の代わりに「受け手言語」「受容言語」と訳すこともある。）「自然的等価の定義」は、いくつかの部分的要件の列挙（[Pim 2010] の第2章）としてなされるが、紙面の制約により省略する。

#### 2.3 方向的等価

方向的等価とは、原文から訳文に向かう方向性を持つ意味的等価性のことである。翻訳は等価を大前提にするものであるが、等価性はシンメトリではない。方向性を持ち、対称的等価ではないという考え方が、「**方向的等価**」である。ここで「翻訳における等価」とは、雑駁な言い方をすれば、「原文：起点言語の文」と「訳文：終点言語の文」の意味内容が等しい情報価値を持つということである。

方向的等価を代数的に説明しよう。翻訳において言語 A で記述されている文  $X_A$  を、言語 B で記述されている文  $Y_B$  に等価翻訳しても、

$$\text{Sem}(X_A) = \text{Sem}(Y_B)$$

は厳密には成立しなくてよいという考え方が、方向的等価である。実際上は、

$$\text{Sem}(X_A) \neq \text{Sem}(Y_B)$$

となるという考え方である。実際、言語 B で記述されている文  $Y_B$  を、言語 A の文に逆向き翻訳して、文  $X'_A$  を得たとすると、（たとえどのように優れて正確な等価翻訳であっても）ほぼ確実に

$$X_A \neq X'_A$$

となる。もちろん

$$\text{Sem}(X_A) \neq \text{Sem}(X'_A)$$

となる。

このように、言語 A から言語 B への翻訳は根源的に方向性を持つが、翻訳により言語 A (起点言語) の世界から言語 B (終点言語) に伝えたい意味メッセージは、等価性を維持するようにはできる。

方向的等価は本質的に翻訳における多義性、つまり 1つの原文が、等価性を維持しながら、何通りにも翻訳できることを意味する。翻訳者は自分の知見や経験により最善の翻訳をすればよい。たとえば意訳、直訳の区別などは、翻訳の多義性・多様性の典型例に過ぎない。

終点言語の文章の長さが、起点言語のそれと比べて大幅に短い場合には要約となる。要約は明らかに方向的等価を狙うが、情報欠落が不可避であるから自然的等価は望むべくもない。要約は同一言語内翻訳であることが多いが他言語による要約もあり得る。

### 3. 高品質の翻訳の追求

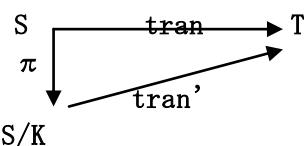
#### 3.1 翻訳の方略

翻訳は人手にせよ機械にせよ、方向性を持たざるを得ないことを前章までで見た。翻訳つまり言語表現の変換が行われる以上、その意味は変容(ゆらぎ)せざるを得ない。ゆらぎが許容範囲を逸脱した場合には誤訳となり、言語情報サービスとしては利用できない。

高品質の翻訳に接近する方略は多数あり得るが、どの方略を取るかは、翻訳者の判断と機械翻訳の利用法(戦略)に委ねられる。起点テキストの内容が翻訳方略を束縛(決定)することはない。また方向的等価は、異文化コミュニケーションを円滑にする社会的擬制としても有用であることを付言する。

#### 3.2 翻訳過程の写像的理解

数学における射(写像)の考え方を援用して、翻訳過程を図示すると下記ようになる。



S: source language text    T: target lg. tx.

**tran** は限りなく自然的等価を目指す翻訳であり、**tran'** は現実的な方向性をもつ翻訳である。S/K は、様々な知識や付加情報を利用した内部的翻訳(注: 書き換え、補助翻訳、中間翻訳など)である。変換  $\pi$  は、翻訳辞書や文法、過去の翻訳例の蓄積であってもよい。機械翻訳の利用であってもよい。

#### 3.3 翻訳文学作品における意味のゆらぎ

文学作品と言えども、原文の意味を正確に反映した翻訳が求められることに変わりはない。しかし、いわく言いがたい文学的香気、雰囲気をも最大限に伝承しなくてはならない翻訳であるから、文体や語句の選択に工夫を凝らす必要がある。原文の意味を精密な白黒写真ではなく、自然で雰囲気のあるカラー写真として再現する必要がある。翻訳者の技量や嗜好による意味のゆらぎ(変容)が入り込む余地が大いにある。その例は枚挙に暇がない。

#### 3.4 数学の言葉における意味のゆらぎ

本質的に意味のゆらぎは極小であると見なせる。興味深い議論が、文献7)にある。

#### 3.5 特許翻訳における意味のゆらぎ

特許権を精密に主張する文章であるから、翻訳によって意味がゆらぐことは極小化せねばならない。しかし、日本文に固有の「の」による名詞連続、連体修飾、連用修飾などの表現により、意味的に等価な機械翻訳(形式的翻訳)が、困難となる事例の報告と対策が、文献8)に詳細に述べられている。

### 4. おわりに

根源的に意味のゆらぎを避け得ぬことが、翻訳の宿命であることを諦観して、翻訳文学を楽しむべきと思う。特許文、法令文、科学技術文、などにおいては、中間翻訳( $\pi$ )を基軸にして正確さが要求される中核情報を確保した翻訳を行うべきと考える。

### 参考文献

- 1) 森敦、意味の変容、ちくま文庫(1991)
- 2) 新田義彦、翻訳における意味の変容、経済集志、Vol. 84, No. 1 pp. 1-29、日本大学(2014-4)
- 3) 新田義彦、機械翻訳の原理と活用法——古典的機械翻訳再評価の試み、明石書店(2012-3)
- 4) Pim, A. *Exploring Translation Theories*, Routledge, Taylor & Francis Group (2010)
- 5) Munday, J. (2008) *Introducing Translation Studies*, Taylor & Francis Group(2008)
- 6) Nitta, Y., Problem of Machine Translation Systems: Effect of Cultural Differences on Sentence Structure, Future Generation Computer System, Vol. 2, No. 2, North-Holland (1986)
- 7) 野崎昭弘、言葉と言葉の間、月刊言語、Vol. 24, No. 2 (1995) pp. 62-69
- 8) 吉川潔、翻訳ソフト(MT)の試訳結果の説明(2014-6-2)[注: 特許基本語句約 3K 句を複数の MT に入力し、出力訳文を分析したレポート。吉川氏のご厚意により閲覧させていただいた。]